今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第二十二回は、新資料から見えてきた波止浜出身の実業家・八木亀三郎（一八六三～一九三八）の事績を紹介し、その生涯から浮かび上がる近代産業史の一端を歴史散歩したいと思います。

第二十二回　伊予が生んだ実業界の巨人・八木亀三郎

●資料の〝奇跡的〟里帰り

平成二十九年四月、今治のタオルメーカー社長の藤高豊文氏が、八木亀三郎関係資料の販売情報をネット検索で見つけます。ただちにこれを東京の古書店で購入し、半年余りかけて整理を行ったところ、書簡・帳簿類・契約書・感謝状・地図など、一九〇〇点余りの資料総数と分かりました。

本紙第十一回でも紹介しましたが、かつて八木亀三郎が営んだ八木本店の店舗は、波止浜の本町通りに現存します。同店が蟹工船で財をなしたことから、後世の人々はこれを〝蟹御殿〟と称したりもします。通りに面した部分が店舗で、奥に私邸が接続します。中庭に面した廊下はすべてガラス戸で、敷地面積約四二〇〇平方㍍の中に約五七四平方㍍の建物群があります。

ここが大正七（一九一八）年八月に落成すると、同年十二月に八木商店を改組し、株式会社八木本店が設立されます。当時は、神戸と函館に出張所がありました。昭和六（一九三一）年に本社を東京へ移し、これに先立って自宅も東京へ移転しています。そして、亀三郎が昭和十三年に亡くなると会社は解散し、八木本店関係資料は波止浜からも姿を消すことになったのです。

その翌年、旧店舗・住宅は豊文社長の祖父・藤高豊作氏が購入します。以来、藤高家別邸として維持が図られ、ここを資料館に再生しようとした矢先、実に七十余年ぶりに資料の里帰りが実現しました。

観菊御會から
八木氏かへる
夫妻同伴して

八木亀三郎・芳枝夫妻
（大正 15 年 12 月 1 日付／東予日報）
※芳枝は矢野本家・矢野嘉吉の次女

●ロシア貿易漁業商への道

新しく見つかった資料などによれば、亀三郎の父・八木友蔵は波止浜の商家・升屋の六代目で、所有する神社丸などを使って、明治十一（一八七八）年に下関や江戸の廻船問屋と取引をしていたことが分かりました。ただ、亀三郎は長男にありながら、友蔵が四十歳の時に生まれた後妻の子であったため、先に分家から迎えた養子の常吉が本家を継承したようです。しかし、友蔵が所有する屋敷と塩田一

旧八木本店・八木本家の中庭
※庭石は、蟹工船が樺太から持ち帰ったものと伝わる

軒については、生前に亀三郎へ譲渡されています。

亀三郎の実業家としての第一歩は、明治二十四（一八九一）年に波止浜の有志と結成した商社「洪成社」でした。帆船の洪成丸を使って、朝鮮やロシア沿海州との交易を行っています。波止浜塩の輸出が主な目的と思われますが、やがて八木商店として独立し、ウラジオストクよりさらに北のニコライエフスク（尼港）が彼にとっての商業拠点となります。ここで同二十六年から鮭漁業と塩蔵鮭の輸入を行い、ロシア貿易漁業商として財をなしていくのでした。

●北洋漁業への挑戦と挫折

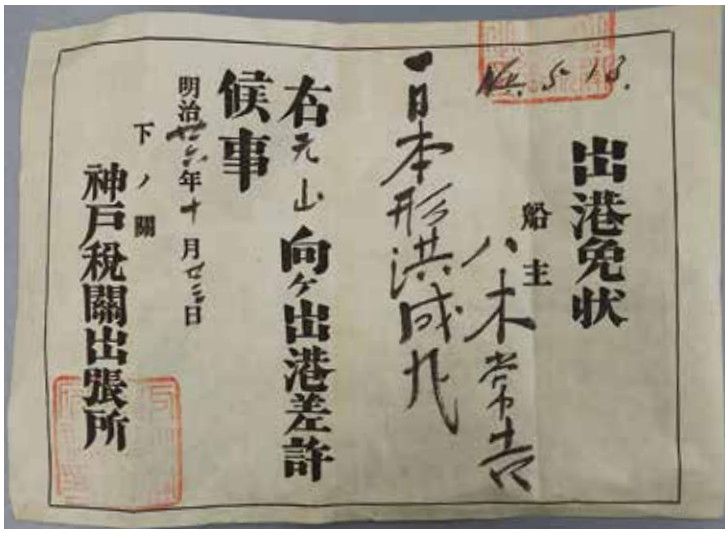
大戦景気にも乗って、大正六（一九一七）年に亀三郎は愛媛県一の高額納税者となります。その一方で、長男の實通は同五年から九年頃まで蘭領インドネシア・セレベス島（メナド港）向けの南洋貿易に挑戦しています。その積荷目録には硝子や陶器に混じって綿製品を確認でき、今治の矢野綿練工場の綿ネルと興業舎の大正布も輸出されました。タオルについては、希望する規格寸法・値段の紋（縞物）タオルメーカーが今治にはないことで、大阪の泉州産を取り扱ったようです。

八木本店にとっての悲劇は、ロシア革命の余波で、大正九年にニコライエフスク市街が廃墟と化す〝尼港事変〟が起きたことです。これによって、ドル箱とされた沿海州の拠点を失い、一時は北樺太西海岸へ漁場を移転します。しかしこれも、同十四年にソ連が活動を禁止したため、投じた多額の資本が水泡に帰すことになりました。

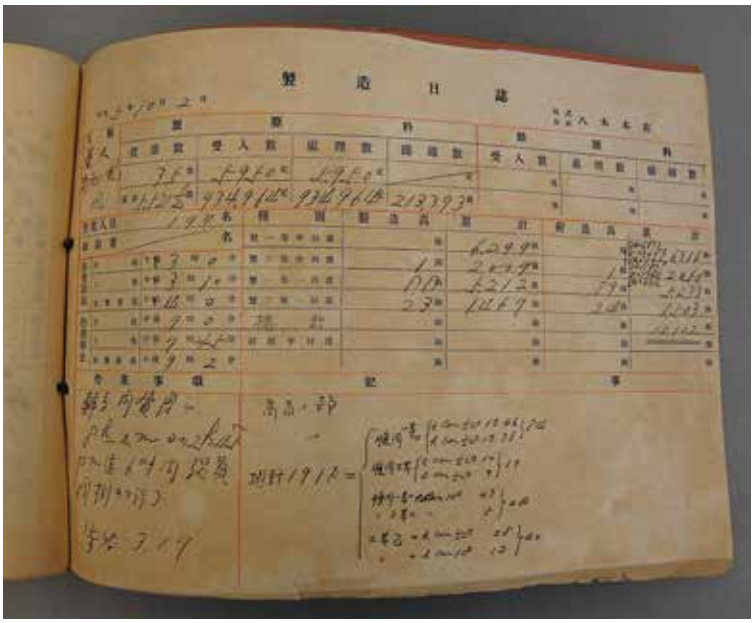
幸いにも、大正十三（一九二四）年からカムチャッカ半島沿岸で始めた母船式蟹漁業が数年間好成績を上げます。實通自ら蟹工船の樺太丸に乗船し、陣頭指揮を執りました。しかし、資源の枯渇や国策等で、昭和二（一九二七）年末に同業他社との合併で樺太丸と美福丸が八木本店のもとを離れます。それでも独自に蟹工船「八郎丸」を仕立て、鮭鱒工船にも挑戦するなど北洋漁業の先駆者として存在感を放ちました。

しかし、時流には逆らえず、浜口雄幸内閣の金解禁にともなう円高政策が八木本店を整理に追い込みます。同社の蟹缶詰などは、三菱商事を通じて英国へ輸出されていましたが、これが昭和五年に不振となり、多額の不良債権を生んだのです。債権者たちは八木を救済しようと、債権を株式に変えて八木漁業株式会社を設立するも、好転には至りませんでした。昭和九（一九三四）年に實通が病死すると、八木本店は水産事業からの撤退を余儀なくされます。

会社の解散にあたり、八木本店は社員・船員（元従業員も含む）への恩義を忘れず、退職金を惜しみなく分配しています。新資料には多くの礼状や感謝状が含まれ、亀三郎の人となりを存分に語っているようです。



洪成丸の出港免状（明治26年）
※元山は日本海沿岸の朝鮮の開港場



八郎丸の蟹缶詰製造日誌（昭和５年）